

率用此法、誨誘其徒。」(淨土宗全書六、一〇〇五頁)とあるが、意は別として語據としては動し難いものがある。

さて「自性唯心」の語であるが、本書卷一に「華嚴解脫長者得唯心念佛門」の題下に、解脫長者の無碍解脫門の經文と、清涼貞元疏の「正并唯心」の文とを出している。特に解脫長者の唯心念佛の境は『摧邪輪』に念佛の眞假を論じ眞なる念佛の果として例示する一である。

更に一の例は毘瑟胝羅居士の如しと説くのであるが、其の三昧境は經に「如來及我、一切衆生、等無有二。知一切法自性清淨」と示すものである。そして斯る自性唯心の念佛が清涼の眞の念佛であり、善導念佛義の正義であるとし、『選擇集』の口稱念佛を假の念佛とし、その果は觀經往生の如しとし、善導の正義を驢すものとするのが『摧邪輪』の所論である。それこそ今「沈自性唯心、貶淨土眞證」ものではないであろうか。又定散心や金剛心の語は宗祖が善導義を顯す場合に用いられるのが常例であるから、次の「迷定散自心、昏金剛眞心」とは、正しく斯る所論を指すものではないであ

ろうか。さらば沈迷の機とは、斯る文の上からも、元祖滅後の門下の異義者を指すものとは考えられない。しかし『報恩講式』にも「念佛修行之人雖多之、專修惠念之輩甚稀也」と述べて次に此の沈迷の文を引くが、今は斯る事實を否定するのではない。たゞ此の文が指摘する人を問題とするのである。更に明恵一人とするのではない、彼を代表とする諸寺の釋門に對するものと考えるのである。本問題は諸種の研究上重要な課題と思われるので、敢て私見を述べて師友の御慈教を仰ぐ次第である。

### 三帖和讃に於ける二三の疑問

多屋 頼俊

三帖和讃の本文に關する疑問お申し述べて御批判お仰ぎたい。從來一般に專修寺にわ親鸞聖人御眞筆の三帖和讃があり、また顯智上人が御眞筆本から寫された和讃がある(高僧和讃お缺)。蓮如上人が文明五年に出版せられたものわ、高田の本とわ異なるところがあるので、高

田のわ草稿本、文明の板本わ清書本に依つたもの、と言われていた。然しそれにいろいろ疑問がある。高田の本わ本年六月、親鸞聖人全集和讃編に收めて公刊せられた。私わまだ高田の原本わ拜見したことわないので、今わ専ら右の和讃篇に依つて述べる。

(一)國寶本。高田のいわゆる御眞筆本わ、現に國寶に指定せられているが、親鸞聖人の眞筆でわない部分があると言われている。和讃篇に依つて見ると、本文に校異お書入れた處がある。校異の書きぶりから見れば、それわ明に後の人が書き入れたものであるが、後人の書入れは校異だけであろうか、校異のある本文もそうなのであろうか。また國本寶三帖和讃の假名遣わ、聖人の他の眞筆本(唯信鈔文意、尊號眞像銘文、一多證文等と異なるものがある。我々わ國寶本のどれだけが眞筆で、どれだけが補筆であるか、補筆はいつ時代に、どんな系統の本に依つてせられたのかお追求しなければならぬ。

(二)顯智本わ、假名遣、和讃の順序等に於いて國寶本とわかなり違っている。その

差違の中にも、原著者親鸞聖人に依る修正と認めにくいものもある。顯智本の筆寫年時わ原著者の奥書から三十餘年後であることと思ひ合わせると、顯智本わその原本の面影お忠實に傳えているものか否かと疑われる。

(三)羽州本。御草稿三帖和讀に收められている羽州本わ國寶本に極めて近く、顯智本よりも古い形お傳えていると考えられる。寡聞の私わ、羽州本わ、いつ誰が書いたものであるかお知らない。且つその原本わ行方不明になつていて直接に見ることができないのわ残念至極なことである。

(四)文明の板本わ、假名遣、言葉遣等から見ると、親鸞聖人以外の人の手が加つていることわ、疑お容れないことである。和讀の順序、所收内容等に於いても、これが原著者による最後の清書本であるとわ考えにくい點が少くない。自分わ三帖和讀の古寫本について、まだ一向に調査もしてないものであるが、以上述べた所によつて、我々わ三帖和讀について、信頼しうるテキストお有つていない事お、ほぼ明にしたと思う。宗門に於いて、殊

に大切な聖典がかくの如き狀態に置かれているのわ——それわいろいろ止むを得ざる事情に依るとわ言え、まことに遺憾な次第である。

なお、右の内容わ「三帖和讀の本文について」と題して、大谷學報三五卷四號(昭和三十一年三月刊)に發表した。

原始眞宗教團に於ける道場に就て

## 寺 西 惠 然

高田の眞佛の如來堂、木邊の毘沙門堂、三河の天子堂を道場とした道場を今は別として、純粹の農民が自己の住居を道場として活躍した、其の道場に就て考察して見たい。そのモデルの一つとして河和田唯圓の道場を求める事にする。現今其の地を探すと、茨城縣東茨城郡河和田村報佛寺がその遺跡であることが判明する。唯圓房は原始教團中最も信仰の面に於て輝いた人物であつて、其の人が此處に道場を構え道友と語りあつたのである。其の道友に大部の郷平太郎がある。

(傳繪)平太郎住居はこの河和田に近い那珂西に居住し、那珂川流域の土地の割合に豐饒なところで米作の好適地であつたため、唯圓の道場に物的支援を與えた。

平太郎と唯圓とは、古來常陸に於ては兄弟であると云ふ傳説がある。それは事實のやうである。祝町願入寺の古文書がそれを證して居る。この願入寺の祖、如信が亦この唯圓、平太郎と密接な關係がある。その關係がながく其の子孫にまで及んで居る。ともかく唯圓の道場は常陸一圓の教團の中心であつて、教團人が此處を集合所として談合し團結したのである。道場は草屋で、改邪鈔に云ふが如きものであるが、彼の弘安の十七ヶ條の如き張文や掟様のものがまだなかつた。他地方にあつたところもある。道場内部は至つて簡素で、本尊は十字の尊號をかゝげ、毎二十八日を總會日として集合した。本尊には九字、六字の尊號を掲げるところもあつたが、主に改邪鈔の云ふ如く『おほよす眞宗の本尊は盡十方無碍光如來なり』とある如く十字の尊號であつた。これが宗祖滅後、光明本尊へと進展して行つた。唯圓の報佛寺の寺寶として、十字